

シンポジウム 人口減少を機にひらく未来社会

高城 英子

○ポストコロナ第3期 Sip への期待（篠原弘道：NTT 相談役 経団連）

4つの課題 Well Being（多様な幸せ） 社会科学的テーマ
地域性 教育（均一⇒個性 失敗を活かす）

○課題の紹介（西村訓弘：三重大学大学院 プログラムディレクターPD）

- ・これからの時代に求められる学びと働き方にアプローチ
- ・「人口減少化による東京一極化」が話題になるが、見方を変えると「最近、1人あたりの収入増加率が高いのは、岩手・島根・山形・青森・徳島」とも見る事ができる
- ・一方で、小学校数の減少とその地域の生活維持サービス低下とは相関がある（地域が消滅）
- ・小学校は地域の基盤でもあり、安易に統合・閉校していきたくない ⇒極端な小規模化
- ・バックキャストアプローチ（逆向き設計）で、未来像を描きたい

○ポストコロナ第3期 Sip での研究報告（①～④）

① デジタル・シティズンシップ・シティ（DCC）で「新たな『学び』」をつくる【課題 A】

～越境する教室、公共的対話、公教育の再構築～（草原和博：広島大学）

- ・小学校危機「離島では生徒が1人の授業」「都心でも登校できず、オンラインでの授業も」
⇒新しい公教育の形へ「教室を越えた学び」を（地域との対話 研究者・学生の参画）
- ・公教育のリデザイン：家庭ベースのバーチャルネットワーク
学校ベースの近隣ネットワーク
コミュニティベースの広域ネットワーク など組み合わせて
- ・デジタル公共圏の構築（ネットワーク型小学校） 実践例：東広島市
例 ○私たちのまちの「とっておきの写真」をとって発表しよう 東広島市内（9校）
○「土地でとれる作物を決めるのは、自然の力、人間の力？」
東広島市と、鹿児島や北海道とつなぐ ⇒ 全国自立拠点型 DCC の萌芽も
- ・大学中心に企画・準備するので、現場の教師の多忙感はない（？）

② 教える側の『学び』を支援する ～バーチャル空間に教師の居場所を作る試み～

（能智正博：東京大学大学院）【課題 C】

- ・先生への過剰なストレスを解消し、先生の働き方の改善するスキリングプロジェクト
「愚痴」から始める対話 匿名での相談 空間的距離を超えた自由な対話
⇒ ネット空間での居場所づくり 地方から学び、協働する実践へ

③ D&I 社会実現へ向けて ～学び方と働き方の視点から～ 【課題 B】

（石井クンツ昌子：お茶の水女子大学）

- ・ジェンダード・イノベーション視点（性差、ジェンダー差、インターセクショナルリティ）に考慮した実証研究として、高校生を対象にした進路選択に関する調査
- ・『働き手不足 1100万人の衝撃』（古屋他 2024）からの学びを参考に

④ だてプロの挑戦 ～誰もが自分らしい生き方ができる社会の実現を目指して～

（山中真也：室蘭工業大学大学院）【課題 D】

- ・パイオニアとしての浅井雄一郎氏（浅井農園）と、北海道伊達市長の堀井敬太氏、愛媛大

- 学の佐藤哲氏を共同研究開発者として結び、地域エコシステムでの農業・まちづくりを
- ・アフリカのマラウイとも結ぶ
- ・浅井農園での実践が着実に進み、世界へも目を向けている（常に現場を科学し、実践）
確かな研究力をベースとした教育を、室蘭工業大学や愛媛大学で
- 伊達市での「あこがれのまち＝だて」をショーケースとして　そして、マラウイでも
- ・科学：自然科学領域の面白さを追求　幼い頃、植物や農業が好き　大人のオアシスになる
- 経営：ビジネスとしての農業　新たな農業経営モデル
- 現場：徹底した現場主義　常に現場を科学する
- ⇒ ただの農業者ではない、Agronomist（農学者）集団へ

○パネルディスカッション

<参加者>西村訓弘氏　三重大学大学院　PD　（進行役）

野崎智也氏　東京都市大学　サブ課題D：「新たな『学び』」×働き方×バーチャル空間における有効性確認（ショーケースの提示）

西岡加名恵氏　京都大学　サブ課題A：「新たな『学び』」のデザイン開発

東博暢氏　日本総合研究所　サブ課題B：「新たな『学び』」と働き方の接続

大山潤彌氏　産業技術総合研究所

サブ課題C：「新たな『学び』」と働き方の空間の創出

相川七瀬氏　歌手　國學院大學修士課程（中学時代に不登校、45歳で大学院）

浅井雄一郎氏　（株）浅井農園社長

浮世満理子氏　アイディア高等学院（通信制高校サポート校）学院長

<メモとして>

- ・アイディア高等学院では、睡眠導入剤を使用している生徒も少なくない。成功経験が少なく、自己否定型が多いので、生徒1人に対してメンタルトレーナーを1名つける体制を確保している。
- ・浅井農園では、いわゆるエリート500名程が方向転換して、農業に取り組んでいる。
1日の体験型に参加する人は、年間1000名に及ぶ。農業を知らない。
- ・自己決定できずに立ち止まる傾向。バランス良く見る事が大事。画一化され、体験不足
- 子どもたちは「世の中は変わらない」と思い込んでいる。体験すると、イノベーターにもなれるんだと考え始める。
- これから求められるのは「技術革新」ではなく、「社会変革」
イノベーションによる創造的破壊
見方・考え方を変えていきませんか？
（例）人口が減っても地域は結べるようになった　選択肢は増えた　混沌を楽しむ
ガチャをたくさん引けば、成功も
- ・「学力」は変化してきている　但し“二極化”している（過渡期か？）
- ・知らせることで視野は広がる。（例：AIの開発で、“障害のある人”の方が鋭いことも）
- ・こう変わってきたをどう見せるか。知恵を絞りたい。
課題を話していても、暗くなる。　ワクワクをどうつくるか。
- ・時間の使い方も多様に　順番を決めすぎ　「○○型」での固定化
- ・個人がいくつもの「所属」を持つ
- ・大企業の50歳代に迷いがある　自分の型を作る　⇒　若い人が離れてしまう

*興味を持った人物

○西村訓弘氏 三重大学大学院 プログラムディレクターPD

型破りな語り口・発想 シンポジウムの進行もスムーズ

○浅井雄一郎氏 浅井農園 常に現場を科学する研究開発型の農業カンパニーを目指す

会社名：株式会社浅井農園（英名：Asai Nursery, Inc.）

創業日：1907年（設立：1975年1月20日）

代表者：代表取締役 CEO 浅井 雄一郎

資本金：1.39億円 *資本準備金含む

従業員：約130名（単体）／約500名（グループ）

生産概要：トマト生産施設・約13ha／研究開発施設：0.2ha

キウイ生産園地：約15ha／果樹苗生産園地：5ha

関連会社：(株)アグリッド（いなべ市） ・(株)PhytoX

うれし野アグリ(株)（松阪市） ・(株)Hacci

南相馬復興アグリ(株)（南相馬市）

常に現場を科学する研究開発型の農業カンパニーを目指す

三重大学の西村訓弘氏の基で博士号（トマトのゲノム育種研究）までとった研究者

生家は三重県の花木生産（植木屋）の5代目

Agronomist（農学者）集団つくりをめざす

*感想

- ・いままでも試行の段階では規模も限られ、チャレンジ意欲も高く成功感を持つ事が多いが、それを基に“全面展開”しようとする動きが鈍くなるのを経験してきた。今回は??
 - ・大学の研究室の柔軟さ、視野の広がり新鮮だったが、継続性は??
 - ・ポストコロナは、「人口減少と偏在化」と「デジタル活用の一般化」がポイントか?
 - ・主催は内閣府。共催にJSTが入っており、会場はJST 東京本部であったが、共催感は感じなかった。会場を貸し、受付などのスタッフでの協力程度なのか?
 - ・「学校」での枠が決まっている活動だけではなく、「企業」や“多様な人達”の視点を知る事は新鮮で、重要。
- 学校でも「パフォーマンス課題」の学びを考えていきたい。京大の西岡氏は会場に「パフォーマンス課題に関するワークショップ」に関するチラシを持参していた。広島大学の草原氏の活動もパフォーマンス課題としての活動。浅井農園での実習も、パフォーマンス課題なら自由に計画できそう。ただし、通常のカリキュラムにパフォーマンス課題を追加する形では、学校がパンクしそう。